

待ち合わせは11時、高架下で

【人物一覧表】

牧田 マキ(16) . . . 女子高校生。主人公

墨田 吉規(19) . . . 芸術大学生

先生 . . . マキの担当教員

【あらすじ】

女子高校生の牧田マキ（16）は、自己表現が苦手で、自分の意見を言うこと、持つことに抵抗を感じていた。特に親の期待に応えることがマキの行動、発する言葉に大きな影響を与えていた。

ある日、マキは千駄ヶ谷駅近くの高架下で、芸術大学生の墨田吉規（19）と偶然出会う。最初は吉規の不思議な言動に疑問や興味を抱き、吉規を凝視するマキであつたが、彼と話し始めるうちに、徐々に心を開き始め、彼の描く絵に次第に興味を抱くようになる。

加えて、彼との出会いの中で、抑圧されていた自身の考えや将来への考え方など、彼女の中で少しずつ心情の変化が起こり始める。

吉規と高架下で過ごす時間と並行して、壁画も徐々に完成に向かう。しかしある日、完成間近だった壁画は突然、何者かによって消されてしまう。吉規は壁画が消された事に落胆する。一方で、マキは吉規との交流を通し

て、新たな自己表現の形を見出すことが可能
になっていることを自認している。吉規もマ
キの変化には気づいており、今回の創作期間
に意義を感じている様子である。

【本文】

○千駄ヶ谷駅付近の高架下（夕）

人通りが少ない閑静な雰囲気醸し出す高架下。電車が通過する音が頻繁に響き渡る。

牧田マキ（16）Ｚ「夢は声に出して言った方がいいらしい」

高架下の手摺りに腰を掛けているマキ。有線のイヤホンをして、音楽を聴いている。

マキＺ「夢を叶えた100人にアンケートを取りました。彼らはどのような場面にて自分の夢を声に出したのでしょうか」

自転車に乗った、墨田吉規（19）が高架下に入ってくる。

マキをチラッと見る吉規。

マキは吉規に気づく様子はなく、音楽を聴きながら、高架下の壁を一点凝視している。

高架下から出ていく吉規。

高架下の壁面は落書きが無く、まっさらな状態である。

マキノ「私はどちらかと言うと、察しはいい方だ」

タイトル「待ち合わせは11時、高架下で」

○品川区立聖心高等学校・教室

タイトル「11月5日」(火)

先生「いいか、君たちはもう義務教育ではない。これからは自分の意見を持ち、自身で物事を決めていくべきなんだ」

約30名の生徒がいる教室の教壇にて、

先生が熱弁を振るっている。

先生「その予行練習がこれから行われる文理選択だ」

真面目に話を聞いている生徒もいれば、友人とこそこそ話しの談笑を行う生徒もいる。

マキノの視線はまっすぐ先生を見ている

が、手元ではペン指回しをしている。

先生「期限は来週の水曜日まで。しっかり親

御さんとも相談して決めるんだぞ」

記入用紙が前の席から後ろに回される。

記入用紙を手にとったマキは、受け取るとすぐに用紙をㇿつ折りし、ファイ

ルに仕舞う。

○千駄ヶ谷駅付近の高架下（夕）

手摺りに腰をかけ、座っているマキ。

音楽を聴きながら、手元にある携帯の

検索エンジンで調べ物をする。

携帯画面「文系 理系 稼げる」

表情を一切変えず、携帯を触り続ける

マキ。

自転車に乗った吉規が高架下に入ってきて来る。

吉規はマキが座っている反対側車線に自転車を停車させ、手摺りに自転車を寄りかける。

自転車の停車音に気が付き、背後に視線を向けるマキ。じつくりと吉規の様子を伺う。

吉規は自転車を停車させた後、高架下の壁面を手でなぞり始める。その後、壁面に対して、近寄ったり、離れたりする。

マキは変わらず、吉規の様子を伺っている。

吉規は突然、目の前の壁面から背後にある反対車線の壁面へと視線を向ける。マキは突然こちらを向いた吉規に驚き、急いで視線を外す。

吉規がマキに向かって歩いてくる。

マキは携帯を触り始め、吉規の存在を無視するかの様な態度を取る。

吉規がマキに向かって歩いてくる。

マキは引き続き携帯を触り、吉規の存在を無視する。

吉規はマキの横を通り過ぎ、マキの目

の前にある壁面を手でなぞり出す。

吉規はマキに一瞬視線を向けるが、マキは変わらず携帯を触っている。

吉規は再び壁面に対して、近づいたり、離れたりする。

吉規は小声で「よし」と発し、壁面から離れる。

吉規が離れていく様を、俯きながらも目で追いかけるマキ。

自転車のハンドルに掛かっているリュックを漁り始める吉規。

マキは吉規の言動に疑問を持ち、目の前にある壁面を不思議そうに数秒間、凝視する。その後、音を立てない様に足元にあるバッグを手に取り、高架下から急ぎ足で出ていく。

リュックを漁り終え、画材を手を持っている吉規は、遠く離れていくマキの姿を目で追う。

○都道414号(夕)

タイトル「11月6日(水)」

天気は雨。

通行車両や舗装面に強い雨が降り注いでいる。

○千駄ヶ谷駅付近の高架下(夕)

高架下の壁面に落書きをしている吉規がいる。いつもマキが座っている歩道側の壁面に落書きをしている。

傘を差したマキが、脚を引きずりながらも、駆け足で高架下に入ってくる。

高架下に入ったマキは少し安堵した表情をし、傘を閉じる。

吉規の存在に気づくマキ。表情が一瞬固まり、足も止まる。

数秒後、高架下から出ようと傘を一瞬差すが、外の激しい雨模様を見て、外に出ることに躊躇するマキ。

吉規に視線を向けるマキ。

吉規はマキの存在に気づく事なく、
黙々と壁面に落書きをしている。

マキは吉規の様子を見て傘を閉じ、い
つもと反対側の手摺りに座る。

「時のチャイム『夕焼けこやけ』が流
れる。

○千駄ヶ谷駅付近の高架下（夕）

雨は変わらず激しく降っている。

吉規は引き続き壁面に落書きをしてお
り、マキは手摺りに腰をかけ、音楽を
聴きながら黄昏てる。

吉規は一つため息を吐き、壁面から離
れる。

× × × ×

マキは俯きながら、携帯を触っている。

手の甲でマキの肩を叩く吉規。

急な出来事に驚き、背後を振り向く、
マキ。

マキが振り向くとそこには吉規がいる。

吉規「何しているの？学校は？」

画材の片付けをしながらマキに問いかける吉規。

イヤホンを外す、マキ。

質問が聞こえていなかったことを察した吉規は、汚れた手を拭きながら、

吉規「何をしているの？最近、いつもそこにいるよね？」

マキは少し考えながら、

マキ「……えーとっ、何もしてないです。あと、いつもじゃないです」

吉規「本当？俺が知る限り、君の回はもう何もしてないけど」

片付けをしながら平然と答える吉規。

マキは再び考えながら、

マキ「……部活で怪我して、来たくなって来ています」

マキに視線を向ける吉規。

マキの足元はローファーではなく、スニーカーを履いている。

吉規「なるほどね、それはご愁傷様」

吉規はリュックからレインコートを取り出し、画材を詰め込む。

少し間が開く。

マキは質問のネタを考えようとして、辺りを見渡す。

吉規はレインコートを着ながら、

吉規「君今何年生？てか、何歳？」

マキ「今 15 です」

吉規「中学生？」

マキ「いや、高校生です」

吉規「あー高校生」

吉規は頷きながら、レインコートのボタンをはめる。

少し間が開く。

吉規「部活って何やっているの？」

マキ「陸上です。3000m 障害っていう地味なやつです」

吉規「（苦笑しながら）地味っていうなよ、自分のフィールドを」

マキ「いや、でも本当に冗談抜きで地味で……」

また、少し間が開く。

吉規「動画や写真撮らないの？」

マキ「え？」

自転車にまたがる吉規。一方、キョト
ンとした表情をするマキ。

吉規「ほら、今時の子は俺みたいにモラルに
反した奴を見つけたら、すぐSNSにアップ
するじゃん。あーいうのやらないの？」

マキ「あー。……私はあんまりそういうのやら
なくて。SNSは捨て垢で好きな歌手のこと
調べるくらいで」

吉規「ふーん。……やっぱ大丈夫か」

マキ「え？」

吉規は自転車を漕ぎ出しながら、

吉規「明日も来るの？」

首を傾げるマキ。

吉規「明日もここに来るの？て聞いている」

マキは首を縦に振り、狼狽えながら、

マキ「た、たぶん……」

吉規「おけー、明日もね」

マキは完全に理解し切っていない表情をしながらも、ゆっくりと首を縦に振る。

吉規は自転車を漕ぎながら、背後のマキに対して振り向く事なく、手を振る。マキはその様子を目で追いかける。

○千駄ヶ谷駅付近の高架下（夕）

タイトル「二月七日（木）」

「時のチャイム『夕焼けこやけ』が流れる。

高架下にはマキ一人しかない。

マキは手摺りに腰をかけ、座っている。携帯は触っておらず、音楽も聞いていない。

落ち着かない様子で待っているマキの元に、自転車に乗った吉規が遠くから向かって来る。

○高架下付近の道中

吉規は高架下にいるマキの存在に気づき、手を振る。

○千駄ヶ谷駅付近の高架下（夕）

マキは右手を上げるが、手の振り方が分からなくなり、上げたまま固まる。

高架下に到着する吉規。

マキの右手は上がったままである。

マキの様子を見た吉規は口角を上げながら、

吉規「どうしたの？ 腱鞘炎になっちゃうよ」

吉規はマキの右手を優しく下げる。

吉規のリュックを漁る姿を、手摺りに腰を掛けながら眺めるマキ。

○千駄ヶ谷駅付近の高架下

タイトル「11月8日（金）」

壁面の落書きの完成度合いは ∞ 割程度。

マキは吉規の側まで近寄り、作業中の

吉規に対して問いかける。

マキ「これっていいんですか？公共的に」

吉規「ん？……ダメだよ」

マキ「ダメなの？」

吉規「……ダメだよ」

○千駄ヶ谷駅付近の高架下（夕）

タイトル「11月11日（月）」

壁面の落書きの完成度合いは△割程度。

吉規は手摺りに腰を掛けているマキに

対してポツキ―を差し出す。

吉規「ポツキ―好き？」

マキ「はい、頂きます」

吉規「……好きかどうか聞いているんだけど」

○千駄ヶ谷駅付近の高架下（夕）

タイトル「11月12日（火）」

壁面の落書きの完成度合いは○割程度。

しゃがみながら作業をしている吉規と

同じ様にマキも腰を下げ、

マキ「そんなもんで決めていいんですか？」

吉規「そんなもんだよ。あと言っとくけど、諦めの意味のそんなもんじゃなくてね」

○千駄ヶ谷駅付近の高架下（夕）

タイトル「11月13日（水）」

壁面の落書きの完成度合いは∞割程度。
マキと吉規は手摺りに腰を掛けながら、
壁画を見ている。

吉規「別に正誤を見極めたいわけじゃないんだ。どちらかと言うと整合性を見定めたい」

マキの視線は壁画から吉規の眼に移る。

吉規「だからこそ、完成させないとね」

○千駄ヶ谷駅付近の高架下（夕）

タイトル「11月14日（木）」

壁面の絵が消されている。そして、壁面が少し黒ずんでいる。

消えた壁画の前に呆然と立ち尽くすマキと吉規。

マキ「あと何割ほど……ですか？」

吉規は少し考えながら、

吉規「…そっちは？」

マキ「…あと」週間くらい」

吉規「そう…。俺は∞から〇かもね」

マキ「…：そう？私には結構いい作品にも見えますよ」

吉規「…：慰め？」

マキ「んーん。私なりの芸術の解釈です」

吉規がゆっくり、マキの顔を見る。

吉規「貴方にとっての芸術は？」

マキもゆっくり、吉規の顔を見つめる。

マキ「察しはいい方なので、欲しい言葉を言えますけど、どっちがいいですか？」

マキは口角を上げる。

吉規はマキの表情を確認した後、一度伏し目をする。その後、マキを見つめ、

吉規「…：じゃー最近覚えた本音ベースの方をお願いできる？」

（了）